

タイトル	創世神話の系譜：古代メソポタミアの資料から(1)
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，31：1-19
発行日	2005-07-29

創世神話の系譜

— 古代メソポタミアの資料から (1) —

桑原俊一

キーワード：宇宙観，創世神話，一神教，古代メソポタミア

はじめに

近年欧米では命の文化が取りざたされているが、欧米文化が抱える古典的でかつ本質的な課題といえる。アメリカ（合衆国）に例をとると、いわゆるバイベルベルトと呼ばれる南部に多くの信徒をもつ「キリスト教原理主義者」の大票田を意識した政治キャンペーンと関係したり、生命維持装置による長期の延命治療をどう考えるのか、アメリカ国民の世論を二分した大きな問題である。原理主義者（福音主義者）たちは、人間は神の創造によるものであり、類人猿から進化した生物とは認めない。彼らの中には核戦争を最終戦争と位置付け、終末が近いことをことさら強調するものもいる。近年の大統領であるレーガンやブッシュとブッシュJrはこうした信徒層の支持なくして大統領選挙で勝利することはなかったといっただろう。

原理主義者たちは中絶を施した医師のクリニックに向けてデモ行進をしたり、ときには襲撃事件にまでおよぶこともある。クローン人間研究に反対するが、一方でモラリストとしての顔をもつ。キリスト教系私立学校教育の現場では聖書に基づく命の文化といわれる創造論が説かれる。

本稿の目的はアメリカの「キリスト教原理主義者」と政治の関係を論考することではない。またこの原理主義者たちの背景にあるキリスト教の創造論と生物科学的進化論との対立構造を検討することでもない。アメリカのキリスト教に先鋭化されているかにみえる命の文化、つまり創造論は多

かれ少なかれ世界宗教としてのキリスト教に内在的で本質的な前提であり、キリスト教にとって創造論はそれ自体なくして存在しえない宗教といっても過言で無い。そこで本稿はこのキリスト教の創造論を文献学的テキストのレベルから問い直そうとする作業であり、キリスト教が依拠する創造論を物語テキストとして検討する材料として周辺世界のテキストを紹介する。ここでは『聖書』とりわけ『旧約聖書』における創造論の論拠とされるテキスト、つまり『創世記』1章から2章のテキストに限定して検討資料を提供する。したがって本稿では『聖書』の創造物語と周辺世界、ことに古代オリエント（西アジア）の創世物語資料を提示し、創成物語の分枝と多様性を明らかにするとともに、そのことを通して欧米文化の現在を論考する材料を提案したい。

1. 西アジア文化圏の創世神話

『聖書』に見られる創造物語がキリスト教の創造論の論拠になっていることは疑いない。しかし本稿の課題は物語としての創造物語を、これらの物語が生まれた時代の周辺世界との関係から捉えて見たい。つまり、それが分布した西アジアや東地中海世界の地平で考察する必要がある。

世界には様々神話や民話が限りなく存在する。この多様な物語の蒐集を可能ならしめるためには、所謂、大航海の時代をまたなければならなかった¹。西洋が東洋に船を漕ぎ出したこの大航海の時代を経て誕生する民俗学や人類学は世界に分布する膨大な物語や民話の収集とそれらの分析、そしてそこから固有な構造を取り出す作業に取り掛かった。物語が人類の貴重な遺産であると同時に、世界に多様な民族の生活文化と切り離しがたいほどに密接に関係することに注目しはじめたのである。わけても西欧キリスト教に絶対固有とみなされてきた神のことばは、17世紀前半にもたらされる楔形文字文化とその分枝さらに周辺世界に目を開かれていくことになる²。以来、今日まで夥しい数の粘土板や碑文が発掘・発見され欧米諸国の博物館に所蔵されている。洞窟から発見された写本(一連の死海写本文書)

のように、偶然による場合もあるにはあるが、たいていは欧米の考古学発掘チームによる情熱と好奇心の賜であった。20世紀も四半世紀以降西アジア諸国のナショナリズムの台頭とともに出土物の欧米への流出は厳しい制限が加えられるようになる。

紀元前3千年期（シュメール初期王朝時代）にはイラクの南部からペルシャ湾に流れ込む大河チグリス川とユーフラテス川河畔に多くの都市国家が栄えていた（例えばウルク、エリドゥ、ラガシュ）。大河の水を利用した用水路網を張り巡らすことで灌漑施設を発達させ、小麦と家畜の安定的生産を確保することができたのである。生産性の向上とともに交易も盛んになり、遠隔地へのルートが拓かれた。文字文化が生まれるとともに、夥しい文書群が残された。

本稿ではそれらの文書群の中から創世物語に限定して論考する。創世物語は一般に(1)宇宙創世物語、(2)人類創世物語、(3)文化起源物語に区分されるが、物語作品にこうした明確な区分が存在するわけではなく、むしろ創世物語の中にそれぞれが織り込まれていることが一般的である。

2. 古代西方世界と西アジアの創世神話

古来、ヨーロッパはアナトリア（トルコ）を陸橋としてアジアと文化的融合と衝突を繰り返してきた。楔形文字文化は西アジア（古代メソポタミア）に誕生し、シリアのウガリット³でアルファベット楔形文字に発展する一方、フルリ語⁴を経由して、ヒッタイト⁵に楔形文字をもたらせたことはよく知られている。特に西方世界との関係で興味深い事実は、前14世紀のヒッタイト帝国時代にフルリ系の神々が篤く信仰されていたことである。太陽女神に変わってフルリ系天候神テシュプ(Tešup)が主神につくこともあった。

創世神話の観点からはクマルビ(Kumarbi)神話を取り上げられよう。この神話は本来フルリ人の物語であり、ヒッタイト版『クマルビ神話』はフルリ語からの翻訳と考えてよい。物語は複数知られている。一つは天の

王権をめぐる神々の争闘が主題となっていて、天上の覇権が物語られる。最初、天上の支配者はアラル (Alalu) であったが、次にアヌ (Anu) がアラルに取って代わる。今度はクマルビがアヌを攻撃することになる。クマルビはアヌとの戦いのさい、アヌの生殖器を食いちぎり、結果として天候神テシュプを生むことになる。物語の終局は欠損部分が多いが、テシュプがクマルビに勝利して終わるように見える。

『ウツリクンミ (Ullikummi) の歌』は『クマルビ神話』の後半部分とも考えられるが、元来は独立していた物語であったと思われる。クマルビはテシュプに復讐すべく泉の傍の岩と交合し、ウツリクンミと呼ばれる岩の怪物を産み落とす。テシュプはクマルビたちに発見されないようにウツリクンミを海に隠し、そこで成長するのだが、クマルビを打ち負かすことがなかなかできないでいる。そこでエア (Ea) が登場する。エアの助力を得てウツリクンミを退け、天上の覇権を確立する⁶。

これら2つの神話は天上界の覇権と王権の世代交代を主要なテーマとしていることは明らかである。神名、アヌやエア、は勿論のことではあるが、テーマそれ自体シュメール・バビロニア神話、具体的には『エヌマ・エリシュ (Enuma Eliš)』からの影響が大きく反映している⁷。しかしヒッタイトのこれらの物語を全体的に把握するとすれば、類似性という点で、アラルからクマルビへ、そしてテシュプへという世代交代はギリシア神話のそれ、つまりウラノスがその子クロノスに、そしてクロノスがその子ゼウスに討たれるという物語によく似ているといえる⁸。しかし、ここで取り扱ったヒッタイトからの神話は天上の覇権や王権の交代というテーマを除けば、いわゆる天地創造という物語の性格は希薄であることを付け加えておく必要がある。いずれにせよ古代メソポタミアの創世神話の一つ『エヌマ・エリシュ』⁹は前14世紀前後に編集を施されながらもフルリ人によってアナトリアにもたらされ、類似した創世神話の構成をとるヒッタイトの神話群がギリシアやシリアの創世神話に大きく影響を与えたことは特筆すべきである¹⁰。

3. ベロツソスの創世神話

『エヌマ・エリシュ』は上記のように早くから古代西方地域においても編集上の改変を受けながら広範囲にわたって伝播した創世物語である。前2千年期中葉の東地中海世界と西アジア、更にエジプトを加えた地域は、陸路と海路による交易の拡大とそれに伴う民族集団の移動や専門職業団、例えば、細工職人などの移住は恒常的な営為であった。大都市には必ず外国人居住区が設けられ、彼らを保護することも為政者の責務であったことが知られている。東地中海と西アジアは民族の移動や帝国の衝突によって一つの巨大で濃密な文化交流圏を形成していった。

さてアレクサンドロス大王の帝国が分裂して、西アジアを支配したギリシア系マケドニア人のセレウコス王朝（前312～前64）がシリアに興る。絶頂期には小アジアから現在のパキスタンにいたる広大な領土を支配したが、以後しだいに王権は弱まり、前64年にはローマに併合された。ギリシア人植民者の定住を促進し、ギリシア文化が東方へ伝播すると共にセレウコス王朝は西アジアの文化を積極的に取り入れた。本論の課題に即して一例を挙げよう。

バビロンの神官ベロツソスはセレウコス王朝のアンティオコス1世（前280～261）に『バビロニア誌（Babyloniaca）』全3巻をギリシア語で書いて献呈している。それ自体は現存しないが、抜粋が僅かながら、数世紀を経て様々に伝わり、後4世紀の教会史家エウセビオスの『年代記』に再録された¹¹。

原初（「最初の年」）、上下双頭人脚魚の姿をした怪物オアンネスが海から現れ、入間に、読み書き計算から建築、法、農耕と、あらゆる文化的営為を教えたのであった。それは、闇と水がおおう世界であったが、その後、同様の怪物が現れ、有翼男女双頭の間人、羊脚有角人間、下半馬姿の間人、下半牛姿の間人、魚尾犬、犬頭馬、馬頭魚尾人、龍、等々、様々な怪獣を生み出した。そして、これらを支配するのはオモ

ルカという名の「婦人」タラッタすなわち、海であった。このように全てが混沌におちいていたとき、ペロスはこれに立ち向かい、タラッタを撃ち殺し、その肢体の半分をもって大地を、他の半分をもって天を造り、そこにいた生き物を滅ぼしたのである。

すべてが湿気であり、そこに生き物が生まれたとき、かの神は自らの頭を切り落とし、神々はその血をもって土をこね、人間を造った。だから人間は賢く、神のような知恵を得たのだ。ペロスはまた、闇を分けて、天地を造り、世界に秩序を与えたが、怪物たちは光に耐え得ず、滅びたのである。ペロスは誰もいない豊かな場所を見て、自分の頭から流れる血と土を混ぜて人間を、またこの「空気」に耐えうる動物を造ることを神々のひとりに命じた。ペロスは、また、天体、太陽、月、五つの惑星を完成させた¹²。

ペロソスがギリシア語で伝えたこの創世物語は正しく古代メソポタミアの楔形文書に残されていたのである。それはアッカド語の天地創造物語『エヌマ・エリシュ』においてであった。ペロスは『エヌマ・エリシュ』に出てくる創造神マルドゥクの尊称ベール（「主」の意）のギリシア語形であり、そしてタラッタはマルドゥクに退治されるティアマト（「海」）のギリシア語形であることが明らかになった¹³。

4. 古代メソポタミアの宇宙創世物語

メソポタミアの創世物語はシュメール語で書かれたものと、アッカド語で書かれたもの、さらに2ヶ国併用語によるものがある。宇宙創世物語を取り上げるさい、前述したように、多くの創世物語は宇宙創世物語や人類創世物語、更に文化起源物語と分離しがたく編まれているのが実情であり、あくまで便宜的区分であることを断わっておかなければならない。更に時代的枠組みに関していえば、シュメール語で書かれた作品が必ずしもアッカド語作品に先立つ宇宙観を反映しているともいえない。そもそも

シュメール人や彼らと共存してメソポタミア文化を構築していったセム人がどれほど宇宙観や宇宙開闢論に興味を持っていたか現存資料から際立たせることは困難なのである¹⁴。現存する文書資料には体系的に宇宙開闢を取り扱った文学作品は残されていない¹⁵。とはいえ、諸作品を紡ぐことで宇宙開闢に関する概略を把握することは可能である。以下諸作品の中から創世物語と関連する諸作品や諸断片を取り上げる。

4.1. 静止的原初状態

始めに言及しておかなければならないのは、前述したように現存するテキストの中に、宇宙創世物語それ自体で完結する作品は皆無であることである。なぜ宇宙が存在するのか。どのように宇宙が創造されたのかといった問いを完結した物語にするというより、そうした問いはむしろ多様な文学のジャンル、例えば呪詛文書や神話の序文の中にそれ自体として物語に組み込まれている。多くの場合、作品の序に現れることが多い。この事実は言い換えれば、宇宙の創造は疑う余地の無い前提あったか、いまだ発掘されない遺丘に眠る粘土板テキストに隠されているかのいずれであろうが、後者の可能性は低いと思われる。むしろ現存するテキストから言えることは、古代オリエントの場合、比較的宇宙開闢的物語に興味を持っていなかったといえそうである。但し、宇宙論的語彙、とりわけ地下界を表出する語彙はきわめて多様であることは注目に値する¹⁶。

断片的テキストから読み解くとすれば、次のように言えるであろう。原初は静止状態であったのだろうか。シュメールのウル第三王朝時代（前2050年頃）のニップル出土の小さな粘土板も、天地生成以前の静止状態を記述している。

- 1 主アンは空を輝かせ、地を闇とし、冥界は[隠]されていた。
- 2 (地の)穴(から)水は流れ出しておらず、何も置かれていなかった。
大地に畝は作られていなかった。
- 3 エンリルの高貴な浄めの祭司は存在せず、

聖なる浄めはとどこうり無く行われたかった。

……

- 5 [天と地] は共に一つであって、
- 6 [互いの婚姻] は行われなかった¹⁷。

……

いづこも月の光は放たれず、闇が覆っている。活力は停止しおり、天の神々も地の神々も地上を歩くことは無かった。この断片から明らかなのは、この宇宙の静止状態は遠い日 (u₄.ri.a)¹⁸ の出来事であって、天と地の婚姻以前の状態を叙述している、ことである。この静止状態は、古バビロニア時代の神名表¹⁹ など見られる親神の一覧等から、神々の婚姻によって破られることは明白である。神々の婚姻と聖婚の原型として宇宙起源的婚姻が叙述される。

4.2. 天地の分離

次の段階は宇宙の分離は天と地の結婚によってもたらされる。『鶴嘴讃歌』と命名される作品から始めよう。「鶴嘴 (gisal)」の讃歌で終わるこの文書の前半部分に創世物語が語られる。

- 1 主は相応しきものが輝き出でることを決定した。
 - 2 主は、彼の神意が覆らないように定め、
 - 3 エンリルは、しかるに地の種が大地から出でるようにした。
 - 4 彼は急いで天を地から分離した。
 - 5 急いで地を天から分離した。
- ……
- 7 ドゥル・アン・キ（「天と地の結び目」）において、……を結び、
 - 8 そして、それを鶴嘴のそばに置いた。日の光が出てきた。
 - 9 彼は労役をしつらえた。彼は運命を定めた。
 - 10 彼は鶴嘴ともこの役割を纏めた。
 - 11 エンリルは鶴嘴の讃美を歌った。
 - 12 彼の鶴嘴は金であって、その頭はラピスラズリであった。

.....20

これは宇宙創造譚ではなく、元来メソポタミアの灌漑システムにとって必要不可欠な鶴嘴を創成し、エンリルはそれを用いて穴を開け、人間を創造する物語であった。この物語の枕部分でエンリルによる天と地の分離が叙述されている。ドゥル・アン・キ (dur.an.ki) で裂け目を結び、鶴嘴が創られる。明らかな前提は、宇宙は天と地から構成されていることにある。

シュメール初期王朝時代末（前 2350 年頃）のギルス（ラガシュ）出土文書の中に、宇宙の秩序が確立する以前の世界を叙述した小さな断片がある。

II 1 [.....]

- 2 主 (en) なるアン（天空神）は雄々しい若者として立ち、
- 3 天地（アン・キ）が互いに大声で呼び合った。
- 4 その時代、エンキもヌンキも形を成されておらず、
- 5 エンリルも活力がなく、ニンリルも活力がなかった。
- 6 日は（いまだ）粘土であり、
- 7 薔は（いまだ）粘土であり、
- 8 月の光は定まって出ることもなく、日の光も注がれていなかった²¹。

.....

宇宙創世の秩序以前を男神である天 (an) と女神である地 (ki) のペアーとする叙述はすでに伝統的叙述である²²。しばしばシュメール語作品では an と ki のペアーに取って代わって an と kur（地下界）として現れる。典型的作品『イナンナの冥界下り』にも見られる。イナンナの冥界下りは大変好まれた文学テーマであるが、冒頭の導入部は宇宙にかかわる描写ではじまる。

- 1 彼女は大いなる天 (an.gal) から大いなる地 (ki.gal) に思いを向

けた。

- 2 女神は大いなる天から大いなる地に思いを向けた。
- 3 イナンナは大いなる天から大いなる地に思いを向けた。
- 4 わたしの主人は天を見捨て、地を見捨て、彼女は冥界(kur)へ下っていった。
- 5 イナンナは天を見捨て、地を見捨て、彼女は冥界(kur)へ下っていった²³。

どうしてイナンナが冥界へ思いをはせるようになったのか文学的解釈はさておき、この文脈からして大いなる地(ki.gal)は明らかに冥界を意味する。つまりkiの意味の範囲はkurを包摂していると解してよいだろう。宇宙の2分割²⁴は維持されている。しかし、4-5行は冥界(kur)に言及していることからすると宇宙の3分割が示唆されよう。

宇宙の3分割が暗示されている例として『ギルガメシュ、エンキドゥ、冥界』を挙げよう。この作品の導入部には物語全体とは直接関係しない創世物語の叙述が見られる。ここでは宇宙は天(an)、地(ki)と地下界(kur)に分離される。しかし基本的宇宙観は天と地に分離されるという2分割は維持されるが、その発展上に、その後地下界(冥界)が地から離されることから宇宙の3分割が萌芽的に暗示されているといえる。

- 1 かの遠い日、かの遠い日、
- 2 かの遠い夜、かの遠い夜、
- 3 かの遠い年、かの遠い年、
- 4 かの遠い日、ふさわしいものが輝いて出でなかったとき、
- 5 かの遠い日、ふさわしいものが注意深く管理されたとき、
- 6 国の神殿においてパンが味わわれたとき、
- 7 国のかまどにおいて精錬が完成したとき、
- 8 天が地から離されたとき、
- 9 地が天から分けられとき、

- 10 人間の名が定められたとき、
- 11 アンが天を運び去ったとき、
- 12 エンリルが大地を運び去ったとき、
- 13 そして彼らがエレシュキガル（冥界の女王）に贈り物として冥界を与えたとき²⁵、

これに本来の物語の筋と直接関連する女神イナンナとフルップの木の話へと展開する。この作品は結果的ではあるが、宇宙は天、地、冥界（地下界）と3分割される。同時に興味深いことはそれぞれに神々が配置されることである。天はアンに、地はエンリルに、そして冥界はエレシュキガルに割り当てられる。

4.3. 宇宙的聖婚と神々の誕生

天と地が分離され、宇宙的婚姻が成立する。つまり交合による聖婚物語として知られているもので、シュメール文学に典型的な対論文学²⁶の一つ『樹木と葦』の前半に出てくる。

- 5 聖なる場所で、浄らかな場所で、聖なる天のため、彼女（地）は自ら美しく装った。
- 6 高さ空なる天は広い大地と交わり、
- 7 英雄なる樹木と葦の種を彼（天）はその胎に植えつけた。
- 8 忠実な牡牛なる立派な大地は天のよき種を受けた。
- 9 大地は命の食物を産み出すのに応じて、喜んでそばに立った²⁷。

宇宙的聖婚が成立した後、神々が誕生する。

『エンキとニンフルサグ』がその代表的作品で、280行からなる神話である。

.....

- 4 デイルムン²⁸の地は浄らかである

- 5 デイルムンの地は浄らかで、デイルムンの地は汚れない。
- 6 デイルムンの地は汚れなく、デイルムンの地は輝いている。
- 7 彼は、一人であって、彼女をデイルムンに横たえたとき、
- 8 エンキが配偶者とそばに横たえているその場所は、
- 9 その場所は汚れなく、その場所は輝いていた。

これに続いてデイルムンにける諸状況、つまり諸動物の諸活動や活力の停止が描写される。デイルムンではカラスは“カー”と鳴くこともなく、鷹も啼かず、ライオンは(生きものを)殺さない。……楽隊は喜ばしい歌を歌わず、嘆きの歌を歌わない。地上の諸活動は停滞する。その理由はともかく、男女の交合、生殖の物語へと展開する。

- 74 エンキは彼のダムガルヌンナ²⁹を妊娠させ、
- 75 ニンフルサグに、彼は(彼の)精液を(彼女)の子宮に植えつけ、
- 76 彼女は(彼女の)子宮に精液を、エンキの精液を受けた³⁰。

エンキはニンフルサグとの間にニンムを生み落とす。エンキは使者イスィムドの助力を得て、エンキの実の娘を妊娠させるのである。神話の世界ではお馴染みなのだが、ニンムからニクツラが生まれ、ニクツラからウットゥが誕生する。更にエンキの浮気をめぐる物語に続いて神話の終章では8神が産み出され、それぞれに職能や指示を与えて終える。テキストの解釈には難解な部分もあるが神々の誕生が叙述されている事実は明白である。万物の存在を前提にエンキとニンフルサグの間に、そしてその子の間にというふうに神々の誕生とパンテオンが確立していく。この他、神々の誕生とパンテオンをテーマとした作品として『エンリルとニンリル』、『エンリルとスドゥ』、『ウとアシュナン』が挙げられる。

以上メソポタミアの創世神話として紹介した作品はシュメール語作品群であり、シュメール・アッカド語両語作品やアッカド語作品は取り上げなかった。その理由はそれらが明確な叙述をもって(1)静止的原初状態、(2)天

地の分離、(3)宇宙的聖婚³¹といった概念を欠いていることにある。たぶんこれらの概念はシュメール人が持ち込んだもので、古代メソポタミアの創世神話の古層を構成するものと考えられる。

註

- 1 時代としては一般に 1400 年ころから 1650 年頃までの、西ヨーロッパ人による東方への進出に始まり、新旧両大陸におけるその西欧列強の勢力図が定まる時期を指す。
- 2 この経緯についてはヘンリエッタ・マコール (青木薫訳) 『メソポタミアの神話』(東京, 丸善, 1994 年); 1-18 頁参照。17 世紀前半のことである。あるベネチアの貴族がトルコのコンスタンチノーブルからエジプトのアレキサンドリアを経て、シナイ半島をめぐり、さらにピラミッド見学をし、それからパレスチナを北へ縦断した。その翌年アケメネス朝ペルシャ (前 559-331 年) の首都であったペルセポリスを訪ね、東方ペルシャ文化の栄光を伝えた。その旅行記の功績の一つは王宮の扉に刻まれた碑文を書き写したことである。この碑文が楔形文字であることが判明し、そしてそれが解読されるまでには半世紀以上の歳月が必要であった。しかし、それらの楔形文書の中に聖書の記述と類似する洪水物語に遭遇するにはさらに 70 年を要した。1872 年に大英博物館アッシリア学部門のジョウジ・スミスは聖書と異教徒文書の類似(洪水物語) という歴史的論文を聖書考古学協会で発表することから、キリスト教と異教の問題さらに旧約聖書と類似する周辺文学の蒐集が一大関心事となっていく。その後キリスト教徒は今日に至るまで聖書に記述される神話とその周辺諸国の発掘と文書の中になんらかの類似が指摘されるたびに執拗なまでの関心を寄せ続けているのである。
- 3 前 1400 ごろ最盛期を迎えたシリアの古代都市で、アッカド語楔形文字からアルファベット楔形文字を案出した。出土文書から同時代のメソポタミアのマリ王国やアナトリアのヒッタイト王国、更にエジプトのファラオたちとの交流が盛んであったことで知られる。言語や宗教などの面で、カナン人と共通する点が多く、その意味で聖書のヘブライ語や古代イスラエルの宗教研究に大いに貢献した。
- 4 フルリ人は前 3000 年期から前 1000 年期にかけて、シリアからイラク北部に居住していた民族。彼らの存在はこの地域から出土した粘土板資料から確認できる。大部分は楔形文字で書かれているが、一部分ウガリット語アルファベットを使用している。但し、フルリ語は非インド・ヨーロッパ語であるこ

とは明らかであるが、語族は不明である。彼らの文化的重要性は早くからヒッタイト王国と接触が認められることである。ヒッタイト出土の文書の中にフルリ人の人名が見られることからその影響の大きさが窺える。

- 5 ヒッタイト王国は前1700年から前1200頃にかけてアナトリア高原の中央部に築かれた古代都市で、楔形文字とヒッタイト象形文字を使用した。彼らの言語はインド・ヨーロッパ語族に属する。諸王はバビロンやシリアに遠征したり、エジプトのラメセス2世と条約を結ぶなど、積極的外交を展開した。
- 6 A. Geotze, "Kingship and Heaven," and "The Song of Ullikummi" in *Ancient Near Eastern Texts*³ ed., J. B. Pritchard (Princeton, 1969), 120-125. なお主要なオリエント神話の日本語訳は杉勇代表訳『古代オリエント集』筑摩世界文学大系1(東京, 筑摩書房, 1978年)に所収されている。以下, 杉『古代オリエント集』と略記する。同書 轟俊二郎訳「クマルビ神話」349-366頁参照。
- 7 シュメール語作品には親族殺しという主題を伴う創世神話がないことは注目すべきであろう。
- 8 ヘシオドスの「神統記」(『世界文学体系63, ギリシア思想家集』広川洋一訳(東京, 筑摩書房, 1960年))は宇宙生成論を体系化していて, 時間軸にそって展開される系譜論である。原初にカオスが生じて, 天と地が分離されるのは中近東の影響であろう。

ヘシオドスでは四世代に分けられる(『神統記』)。これは『エヌマ・エリシュ』の書き出しに始まる神々の世代に対応する。

第1代: カオスの子供たちの誕生 123-5 ギアの子供たちの誕生 126-53

第2代: カオスから生まれたニュクスの子ら 211-32

 ギアの子ポントス(海)の子ら 233-9

第3代: 主な系譜はポントスの孫たちとウラノスの孫たち

第4代: ゼウスを中心としたポセイドン, アレスとアプロディティの子孫やその他の神々の系譜 886 ff.

なお古代ギリシアには少なくとも3種類の宇宙創世物語が存在する。西村賀子「古代ギリシアの創成神話」月本昭男編『創成神話の研究』所収155-176頁を参照。

(1) オケアヌス(Oceanus 大洋)が重視される。

「河も海も, 泉も深い井戸もすべてこのオケアヌスに発する」『イリアス』21: 196 f.

太陽はオケアヌスから天に上り, 星辰はオケアヌスに沈んで再び輝きを取り戻

して昇るとみなされる。オケアヌスは円盤状に大地を取り巻くが、これはバビロニアやエジプトの概念の反映であろう。大地の下方は天と地の距離と同じだけ隔たるハデス（冥界）とその下方に青銅で出来た暗闇のタルタロスがある（ホメロスの『イリアス』、『オデュッセイア』は松平千秋訳、岩波文庫による。）

(2) 「夜」を第一要素とするものでオルフィック詩に典型的である。

前五世紀のアリストパネスの喜劇『鳥』で同様の宇宙生成論が語られている。

「太初に混沌（カオス）があった、それに夜とくらい幽冥とそれから広い黄泉とが。してまだ大地も下空も青空もなかった。その幽冥の果てしのない懐ろに黒の翼の夜が、一人でもって卵を産んだ。その中から時たち月満ちて、いとしなつかしい愛（エロス）が生まれ出た。その背は金色の羽根に輝いて、疾風の渦巻きにしも異ならなかった。これが潤やかな黄泉でもって、暗澹として翼をもたる混沌に通いわれわれのやからを育くみかえし、まず最初に光明に接せしめたのだ、その愛があらゆるものを交わらせた前には、不死の（神々の）やからもまだなかった。それがてんでんに交わりあって、蒼穹も大洋も大地もさきわう神々の、常盤なるやからも生じたのだ、それゆえわしらはあらゆるさきわえる神々よりも年長なのだ。」（呉茂一訳 ちくま文庫所収による）

(3) ヘシオドスの『神統記』上記参照。

⁹ 後述するアッカド語による創世神話の一つ。

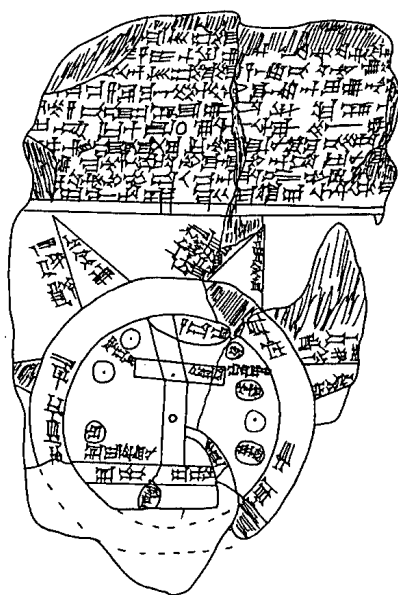
¹⁰ ギリシアは言語学的にインド・ヨーロッパ語族に属しながら、非インド・ヨーロッパ的神話モチーフや神名を強く残したのは地理的關係によるものであろう。ギリシアは東地中海に位置していて、エジプトやアナトリアそしてメソポタミアと経済的・文化的交流を早くから持ち続けた結果とってよいだろう。ギリシア神話に登場するお馴染みの女神たち、例えば、アテナ、ヘラ、アルテミス、アフロディテなどはアナトリアやシリア（＝フェニキア）起源であるし、男神アポロンも非インド・ヨーロッパ語系であるとされる。ヘパイストス、ダイダロスなど細工神もシリア起源であろう。Cf. R. du Mesnil du Buisson, *Nouvelles Études sur les Dieux et les Mythes de Canaan* (Leiden, 1973), 48-55. T. H. Gaster, *Thespis* (Gordian Press, 1975), 161. C. ゴールドン 柴山栄訳『聖書以前』（みすず書房、1967年）、222頁、268頁。

¹¹ 第1巻はバビロニアの地誌や創造について記している。第2巻は大洪水並びにナボポナサールの以前と以降の王朝について記述し、続く第3巻はアッシリアの支配の時代から、おそらくアレクサンドロス大王の征服時代まで書かれていたと思われる。"Ancient Mesopotamia in classical Greek and Hellenis-

tic Thought,” Civilization of Ancient Near East, ed., J.M. Sasson (New York, 1995), 62-63. Cf. A. Heidel, *The Babylonian Genesis*² (The University of Chicago Press, 1974), 77-81. 古代メソポタミアの創成神話に関する日本語訳の資料集として、月本昭男「古代メソポタミアの創世神話」月本昭男編『創成神話研究』(東京, リトン, 1996年)がある。以後この資料については月本「創成神話」と略記する。

- ¹² 月本「創成神話」11-13頁による。
- ¹³ 但し、今のところ怪物オアンネスについては『エヌマ・エリシュ』からは説明され得ない。月本「創成神話」13頁参照。
- ¹⁴ 古代メソポタミアの宇宙論や宇宙開闢説を包括的に取り上げた論文や研究は以外に少ない。その主たる理由はこの課題をテーマにした文献資料が不足していることにある。同時に古代メソポタミアの人々があまり興味を持っていないことに起因することを示唆する。最も信頼できるアッシリア学事典 *Reallexikon der Assyriologie* 6. Band(1980-1983)においても *Kosmogonie* あるいは *Kosmologie* の項目はあるが大きなスペースは割り当てられていない。*Kosmogonie* の項目を出筆した W.G.ランバートはバビロニアの創世神話の出版を予告しているがいまだ出ていない。
- ¹⁵ 世界最古の地図としてバビロニアの世界地図が知られている。バビロンを中心にしてティグリス河とユフラテス河、更に地中海とペルシャ湾が描かれているが、われわれが今日いう地図ではなく、神話的宇宙を表象していると考えられる。

バビロニアの世界地図



BM 92857 World Map
obverse

Cf. W. Horowitz, *Mesopotamian Cosmic Geography* (Eisenbrauns, 1998).

- ¹⁶ 拙論 “A Study of Terminology of the Netherworld in Sumerian-Akkadian Literature” (1)人文論集 8号 (1997年3月) 1-35頁, (2)人文論集 11号 (1998年10月) 271-295頁, (3)人文論集 12号 (1999年3月) 65-91頁, (4)人文論集 13号 (1999年7月) 87-117頁参照。
- ¹⁷ 以下引用するテキストは私訳である。すでに日本語訳がある場合は参考にしたが原則として私訳を優先した。テキストについては NBC 11108 J. von Dijk, “Existe-t-il in ‘Poème de la Création’ Sumerien?,” *Alter Orient und Altes Testament* 25 (1976), 128f.参照。
- ¹⁸ MBI 1 cl. x & xi J. von Dijk, “Le motif cosmique dan la pansée Summérienne,” *Acta Orientalia* 28 (1964), 35-39.

かの遠い日に, それはまことに遠い日に戻るのだ。
 かの遠い夜に, それはまことに遠い夜に戻るのだ。
 かの遠い年に, それはまことに遠い年に戻るのだ。

断片的で不鮮明なテキストであるが, こうした静止状態の後, 天と地の婚姻が記述される。

¹⁹ *TCL XV* 10.

en.ki	nin.ki	主なる地	女主人なる地
en.mul	nin.mul	主人なる星	女主人なる星
en.ul	nin.ul	?	?
en.nun	nin.nun	主なる君	主なる王女
en.kur	nin.kur	主なる山	女主人なる山
.....			

同様の一覧表として, *CT* 16, 13 ii 9ff (悪鬼らに対する新アッシリアの呪文)がある。

- ²⁰ テキストは G. Pettinato, *Das Orientalisch Menschebild* (Hidelberg, 1971), 82-85。英訳に S. Kramer, *Sumerian Mythology* (American Philosophical Society, Philadelphia, 1944), 51-53がある。月本「創成神話」17頁参照。
- ²¹ J. von Dijk, “Le motif,” 39-44。月本「創成神話」14頁参照。
- ²² アッカド語でシャムーとエルツェトウ (*šamu u eršetu*) のペアーとなる。
- ²³ 五味亨「イナンナの冥界下り」杉『古代オリエント集』所収 25-頁参照。
- ²⁴ ここでいう分割は必ずしも数学上の割合を意味するものではなく概念上のも

のである。したがって、3分割といった場合、均等な割合ではなく、例えば天一地一冥界のように分割することを含む。この場合においても大地を中心に天上界と地下界と二項対立的区分が保持されていると看做すこともできよう。しかし、宇宙の分割についてはテキストと時代によってばらつきがあり、はっきりしない。

- ²⁵ A. Shaffer *Sumerian Sources of Tablet XII of the Epic of Gilgameš* (Diss. Philadelphia, 1963). 月本「創成神話」17-18頁参照。
- ²⁶ アダミン・ドゥツガ (adamin-du₁₁-ga) と呼ばれる文学ジャンルであり、『鶴嘴と鋤』、『魚と鳥』、『夏と冬』など対立概念を立てて叙述される一連の文学。シュメール語作品が多いが、アッカド語訳のついたものもある。詳細は杉『古代オリエント集』における五味亨訳「ドゥムジとエンキムドゥー牧羊神と農耕神の言い争い」の解説部分43頁参照。
- ²⁷ J. von Dijk, “Le motif,” 44-57. 月本「創成神話」20頁参照。
- ²⁸ ペルシャ湾のバハレーン (=バーレーン) 島と定位されている。
- ²⁹ エンキの妻、ニンフルサグの別名、ニントゥともいわれる。
- ³⁰ テキストは P. Attinger, “Enki et Ninhursang,” *Zeitschrift für Assyriologie* 74/1 (1984), 1-52. 杉『古代オリエント集』における五味亨訳「エンキとニンフルサグ」15-22頁を参照。
- ³¹ アッカド語作品に宇宙的聖婚を主題にした天地創世神話は見当たらない。天地の交合はシュメール人によって持ち込まれた可能性が高い。ただ、アッカド語作品のうち『ドゥンヌの神統記』または T.ヤコブセンによれば『ハラブ神話』と呼ばれる神話は異色である。ヒッタイトの神話『ウツリクンミの歌』やヘシオドスによるギリシア神話『神統記』に看られる神々の親神の殺害や近親相姦が叙述されている。世代交代と王権の確立という点では『エヌマ・エリシュ』や上記のヒッタイトとギリシアの神話と共通する主題をもつ。

原初、「犁 (Harab)」は「大地」を妻とし、家族をなす。荒野に畝を作り、犁で鋤いて「海」を造り、また「家畜の神」スムカン (アマカンドゥ) を生む (1-5行)。そして、ドゥンヌの町を建て、「犁」はドゥンヌにおいて自らの支配を浄めたが、「大地」は自分の息子スムカンに顔を向けて言う、「おいで。わたしはお前を愛したい」。スムカンは彼の母である「大地」を妻とし、彼の父「犁」を殺害して、ドゥンヌに横たわらせた。そしてスムカンはその父の支配を受け継ぐ (6-13行)。しかし、スムカンが姉「海」を妻としてもうけた息子、「羊」の神ウがやって来て、スムカンを殺害し、ドゥン

ヌに横たわらせた。ウは彼の母である「海」と結婚し、「海」は彼女の母「大地」を殺害する。彼（ウ）はキスリームの月（バビロニア暦第8の月）の第16日に支配と王権を確立した（14-20行）。ところが、続いて、ウの息子「牧神（?）」がその姉妹「川」を妻とし、父ウと母「海」とを殺害して、彼らを横たわらせた。テビトの月（バビロニア暦第9の月）の1日に支配と王権とを手にした（21-24行）。以下、同様に兄妹婚と親殺しがシャバトとアダルの月（バビロニア暦第11と12の月）に繰り返され（21-36行）、新年に、ドゥンヌの秩序とその支配と王権とが言及されるらしい（37-42行）。

月本「創成神話」30-31頁参照。Cf. T. Jacobsen, "The Harab Myth," *Studies in the Near East* 2/3, (Malibu, 1984).